

2014/10/8

アートから見る日本社会 オーラルヒストリー インタビュー文字起こし

インタビューイ:大叔父 N (祖母の妹の旦那さん)

大叔父

「子供に話したこともあるけど、この頃はあまりしないですよ。いつまでも、あんまり引きずっていてもしょうがないしね。ただ自分としては、なんというか、俺は人一倍、戦争について、あんま戦争が好きじゃなかった方だから。だけど、結局日本は資源が乏しい国でね、そんなアメリカみたいに資源がいっぱいある石油なんてジャボジャボでるところにね、そんなことを相手に戦ったって、そりゃ、勝ちおくれで負けるってことわかってるんですよ、そういうことはしちゃいけないよね。それに、まあ、外交がへたくそだったかもしれんしね。やっぱり、あまりにも軍人が強すぎたんよね。政治家はうまくいかなかったんじゃない。だから、何から話したらいいかなというと、やっぱり衣食住についてでしょうね。でしょうね、やっぱり話すときは。」

自分

「僕も、予備知識として、昭和のちょっと前は世界恐慌とか、世界の経済も、いろいろ打撃をうけて、特に、日本はさらに列強との争いで、輸出制限とか、経済的打撃が、だいぶきて、昭和6年。ちょうど、何年生まれでしたっけ？」

大叔父「7年」

自分

「生まれる一年前に満州事変が起って、だいぶ、戦争が始まったあとにお生まれになったと思うんですけど、その時の、生活事情というか、食事とか、衣食住はどんな感じだったんですか？」

大叔父

「だから、そのころの、6年くらいは俺は生まれてないし、もう実際、記憶に残っているちゅうことは強烈な、なんかインパクトがないと残らないよね、年々、そのときはおれがずっと、ノートに書いてたの、敗戦頃、まだ十二、三歳で、ずーと戦争の時、終戦なったころ、持ってたんだけどね、田舎をでたら、田舎の方も妹が家造って、建て替えたなんかしてるから、もう捨てちまった言うもんね、遺産もいらんてちゅ思っただけで、俺にしちゃ宝だったんだけどね。もう、あの戦争が八月十五日がね、あと一ヶ月でも早け

れば、あの終戦なればね、大牟田、人口20万が相当助かったんですよ。そのあとでも、家が焼けずに、苦勞しなかったと思うのよね。家から、石炭運ぶど、炭鉱汽車の線路があるわけ、そっから見ると大牟田駅だって焼けてるですよ、みえるのはもう市役所、と化学工場、三井化学の。それやると大牟田が火の車になってしまう。化学工場、化学工場だから、火薬作ってたからね、そういうところはやらないのよね、アメリカちゅうのはね、もう、せーいっぱい調べて攻撃するの。だから、工場だって、その、立ち直れるようなところだけしか爆撃してないわけ、そういう、危険性があるところは、将来のこと、日本が再起するために、結局、考えて攻撃してくれてたんですよ。今、大きくなって考えるとね、というのは、それなんかは俺はわからないから、やっぱり、それまでは、神の国だ、神国だって先生が精いっぱい教えてるでしょ。そして、一夜にしてバーンとやられたんだもんね。でうちも、うちも妹も戦災で亡くなったんですよ。で、おふくろが背負って逃げる時に、もう、窒息死したんだよね。ちょっと病気してて、病気気味だったから、親戚頼っていくうちに、こと切れてたからね。そういうことで、非常にアメリカを憎んどったわけ。(言いにくそうに)」

自分「小さい頃？」

大祖父

「うん、今でゆうと中学1年くらいやな。だから非常に戦争反対については、なんていうか、非常に僕は言ってたんですよ。ただ、負けた、ただアメリカっていう国は戦争が終わったらがらりと変わったもんね。もう優しくて、というのも、うちの昭和16年、昭和17年はじめ頃かな、シンガポールを日本が攻撃して、マッカーサーが捕虜になったときのその捕虜を大牟田に二百人連れてきたの、ほんで、その捕虜を坑内で働かせるわけ、石炭掘らせたりなんか、そすとね、来たときうちの前、通っていくわけね、二百人ってたらすごいよね。そのとき それに、日本人みたいに、1m50 五尺三寸の日本人 1m50cm ちょうどね、んな奴が平均で、向こうは70くらいのでっかいのがこう来るもん 最初にアメリカ人見たときはそりゃびっくりしたよ。1m70 から 80cm の、身長差見て、『うわ、こんなやつに立ち向かってるのか』と、武器が無くても日本がやられると。(笑ながら) そうやって捕虜こき使っていると、こっち食料が足らんから、結局、サツマイモとかそういうのを食べさせるから、痩せこけて、もうこう痩せて、半年もしたら、よたよたして、朝晩通うわけ。おらは、サツマイモを最初ふかしたのをやりおったわけ。そすと、『サンキュー、サンキュー』言ってたべよったのね、喜んで、そして、立ち止まると、憲兵がやってきて銃振り回して怒るわけ。それでも、おれはやってたわけね。そのあともサツマイモの生のをやってたの、それでも生だって喜んで食ってた。食料がないから。こっちだってないから、そういう時代だった。バーンと飛ぶけど、そのあと、日本が負けて、話バラバラになるけど、帰るときは、『まさきー。』ってジープで来た。拳銃つけて、マシンガン持って、もう、

うちのおふくろはね。」

自分「捕虜だった方がですか？」

大叔父

「うん、捕虜の方がね。で、うちのおふくろ飛び上がって腰抜かした言うもん。俺たまたまいなくて、どっか、鍵取り行ってた、たら、いっぱい、チョコレート持ってきて、くれて帰ってある。」

自分「くれて一、置いて帰って？」

大叔父「うん、そのころチョコレートなんて生まれてこの方食べたことない。(笑ながら)『ほーチョコレートか。』思って、で、とにかく衣食住で、食べ物がないのが一番困るよね。」

自分「戦後の食糧のもうない時代？」

大叔父「うん、もう食べ物がないから、もう、なんでも、昔のひとはね、またみんな優しくかったよ、少々泥棒してもね。(思い出すように、)」

自分「見逃してくれた？」

大叔父

「見逃してくれた。子どもだったらね、で、俺なんか、弟たちが、『兄さんスイカ食べたい』って、『なら付いてこい』って、電車で行くわけ。で、大牟田で改札の方には出ないんだよ。金がない、切符買ってないんだから。反対の方に、『おーい、逃げろー』ってばあーと反対に逃げて、スイカなんか持って帰りよったよ。スイカだ梨なんかとかいってね、そういうこともあるし、(懐かしそうにしながら)食べ物だけはやっぱりないと、根性が、子供が、根性が腐る。曲がるちゅうか、だから、昔の人は、あの、なんていうか、優しくかったよね。例えば、衣食住の衣を話さなんけど、そういうことで、食から入ったけど、食料だけは、腹いっぱい食おうたってないんだもん。食べたってさ、もう、教室だって、先生ひるだないんですよ、もう授業、こちで、ブー、ブー、でおならせ、こちでブー、ブー、って、しまいには先生もブーっておならすんの。そんな状態で、(笑ながら)汚い話だけどね。あるとき、うちの親戚のおばさんがサツマイモ収穫するからって『まさき一手伝えー』っていうから、『いいですよおばちゃん』って手伝ったわけ。そしてこう、袋に詰めて、置いてったわけ、で隣の畑の人も置いてたわけ。そして、終わって一つだけもらって帰ったわけ。そしたら、おばさん家のだからいいだろうって思って、友達のこんな痩せてるやつに、『お前

んどこ自転車あるか?』って聞いたら、『ある。』っていうから、『もってこい。』言うて、ほんで、『そこの、そいつに、これを、どこどこに配れ』って、やせっぽちから、仕舞には、これ、おばさん家のか、隣の人のか分からなくなったから、あとで捕まった時言い訳に困るなと思って、先生の内に届けたのよ。一回だけ10Kgくらい、お芋を、そしたら先生喜んで『おーN君きがきくなー。』って、食っちまったわけ。そしたら、笑い話だけど、そのあとね、友達がとりに行ったときね。あんまりだんだん減っていくもんだから、おばちゃんがずっとあとつけて行ったんだって、そしたら大牟田高等小学校の生徒やった。で、学校来てから、『全部出ろー』って言われたんですよ。で出たら、隣のおばちゃんが『こいつだー。』って。で俺が言った配達人が『こりゃ持ってった。』震えて。そしたら、で、全部調べ上げたんだ。そしたら一つだけたりないんだよね。本当は先生にあげてる。『ありやどうした?』って聞いたら、俺にこっそり『先生にやった』ていう。で、先生真っ青なっとなるわけ、担任の先生、イモ食ってしまったから。ほんで、校長先生が俺呼んでからひっぱたいて『なぜ言わんか』って。だけど、ぼくは『言えんと、先生をまきぞいにした』と、『だから、先生も同罪だと』って言った。そしたら、その先生、峯先生というんだけど、呼ばれちゃって、きて、怒られてんの、『なんで、子供がこんなイモできるわけないやないか。それをぬけぬけと貰って、食って』って、先生も同罪だから、一緒に謝りに行ったよ。

(笑ながら) そんなバカな話もあるんだよね。それとか、試験の時になるとね、クラスの頭の悪い奴が俺の横ばっか来るの。おれが答案用紙を見せるから。そう、先生がこう、むこう向いてるからパッと見てからこう書くわけ。あまりにも、あたまの悪い奴が、ずんずん成績上がった言うもん。成績が上がるとそいつが俺に米持ってくるわけ、俺も得意になって、もって帰るでしょ。おふくろさんに、『ちょっと手伝ったらこんだけ米くれた』って。おふくろは喜んじやって、『それは誰だ』っていうから『さらだってやつ』って、そしたらおふくろバカみたいにそいつのおっかさんに謝った。『ありがとうございます、いつも白米貰って』、そしたら、『うちはあげてません、ずっと減っていくのはお宅の息子が持って帰りよった』っち、そういうバカなことしてね。食べ物譲り合って、うちも貰ってくりや、全部配るし。」

自分「助け合ってたんですね。」

大叔父

「ほんで、7月の28日やったかいな、大牟田が第二次空襲でやられたとき、もう寝てたんですよ。そしたら親父が『起きー』って起こしたわけ、そしたら、もう真っ赤なんですよ、『こりゃ空襲だ』って弟たち起こした、昼間遊んでるから、なかなか目覚めないわけね、もう、ひきずり起こして、靴履かして逃げた。(深刻な顔) もう、着替えなんて、なんも持たずにげとるから、着るものがないんですよ、そのまま逃げて、帰ってきたら、おばさん家行って、もう、あんまり真っ黒にすすけて、おばさんが、『外の水道で頭からかぶって洗

って来い』って、もう着替えがないから、パンツ洗ってね絞ってそのままはきよるわけ、乾くまで、ズボンは塀の上に乗せといて、交互にね、まあ笑い話、ズボンを洗いたいときはパンツをね履きよった。それで学校行きよった。それでも全然笑われない。だからもう、たったそれだけでしょ。こんなバカみたいな、タオルに紐つければ、びっこみたいになるじゃない、おじいさんたちがこうやととるけん、ああ、あれでいいんだなって。もう笑えんけどね、今みたいに農薬なんか川に流さないし、そこで泳いでもへっちゃらなんです。水のだって川の水。それでね、あがるともうないんです、自分のやつはもう誰かが持って逃げとる。もう、そこまで落ちてしまった。もう人間の終戦後腐って、もうみじめでしたよ。もう買おうたってぜんぜん無いんだもん。だから、あれやったよ、2km くらい俺すっぽんぽんで帰ったもん、で友達ん家いったら、そこで一部くれたんだけどね。洋服ないし、親父も弟たちもそんな衣食住で、とにかく、だけど、それでも日本は勝つんだと思ってね、我慢しよったわけね、だけど、いきなりのボーンと 8 月 15 日なったら町内会長さんが回ってきて、今日、天皇陛下のお話があるから、12 時から聞いてくれって、なんのことやろかって、たら、ちょうどそのときはうちは焼けてて、おばさんお隣の魚屋さんところがラジオもとったから、30 人くらい集まった、そしたら、戦争が終結したと、耐えがたきを耐えとか天皇陛下が言ってたでしょ、みんな泣いてたけど、俺はよかったと思ったね。みんな惨めだったけど、みんな仲が良かったていうか、同志っていうか仲間ちゅうか、みなさん助け合ってたんやな。(思い出すように) 結局、学校行く時もね、今みたいに、子供がいさつもしないでしょ、昔は例えば極端に言えば、朝行きよったら、散髪屋の親父がちゃんと玄関先で『おー、おはよー』って言いよったら、我々も『おはようございまーす』って言ってたし。下駄屋のおばあちゃんも言ってくれたし、魚屋の兄ちゃんも言ってくれよったし、みんなで学校行こうって、肩持ってたね。帰れば、みんな『おかえり』って迎えてくれるし、今は全然ないし、もう下手に声をかければ 110 番されるし、例えば、大牟田の人が、上今泉ってところに住んどうけど、そこの孫が、たまたま、そこの海老名小学校で発表すると、そしたらその爺さん喜んじやって、見に行つて。帰り待ちよったわけ、玄関のこう外れたところで、んで、うちの五年生の中尾何とかってまだ終わらんかねって言いよってね、みんなびっくりしちやって、こりゃ、人さらいかもしれんて、先生に行つとるわけ、また先生もバカだから、警察に電話した、そしたら、校長先生も出てくるし、パトカーも来るし、『お宅は何しよるんですか、子供の名前呼んでから』って、もう大事やつたて、俺の友達、大牟田出身の人は、『もうだめだ N さん、パトカーまで来た。あれには俺は参った』って、(笑いながら) もう大変でしたよ。」

自分「大変な時代だったんですね」

大祖父「大変だったよ。」

自分「学徒出陣があったと思うんですけど、大学生も戦地に行ったと思うんですけど」

大叔父「高等小学校に行くとは小学校と違って、そういう爆弾にやられてたところに行って、片づけてたんですよ。」

自分「勤労ですよ。勤労奉仕。」

大叔父「勤労奉仕ね。そうするとね、勤労すると、手が出てきたりするんだよね、ほら爆撃でやられて死んだのよね。それが怖かったね。(しみじみと)」

自分「空襲後の片づけですね。」

大叔父

「あとね、うち、妹が五歳で死んじゃったでしょ、で、おばさん家頼って行って、もう死んだやつ、連れてこられて嫌やろね。葬式あげようたって、お坊さんがいないんだもん。だから、親戚に、少しする人がいて、『一番ありがたいところだけあげてください。あとは火葬行きます。』って、親父と俺とそこのおじさんとで行ったんですよ。そして、死んだ死体入れる棺がないから、おばさんが気前よく、コメを入れてた、箱ね。それに入れてくれた。そしてね、骨壺は塩がめ。ただ、自転車に乗せて、ついて行って、たらね、火葬場やられて、死体の山なんだよ、一瞬、もう別世界に来たみたいやった。『あー、こんなに人間どうすんだろう』と思って、ところが、おれんところは小さかったからね、結局、火葬場の一番端しか空いてなかったから、そこで、焼いたんだけど、油を重油少しずつ、かづめ缶に憲兵がくれたんだけど、それをかけて、木はそこら辺の焼け跡から、兵隊さんが持ってきてくれとんですよ。まだ、焼け、こんな板のさ、少し燃えカスみたいのをもって来とるわけ、それをひっかけて、自分で焼けて、だから俺は12歳で自分の妹を焼いたよ。(言い聞かせるように) おじさんは怖いから『俺は会社があるから』って帰っちゃたの。だから、俺も怖かったよね。(回顧するように) もお、十日くらいなされたんだから、とにかくね、人間の死体ちゅうのはね、また話すけどね。上からばっかかけて、木をかけてボンボン燃やすから、裏側は生だよな、生っていうか、そしたら起き上がるんだよな、うって、それが怖いんだよな。『うあー』て腰抜かすよね。それから、ひっくり返さなならんでしょ。ひっくり返すのに、モウソウダケって知ってる？竹の、竹ってあるでしょ？あれのでかいのが火葬場の近くのヤブのなかにあるのを、兵隊が軍刀で切って、これでひっくり返せっていうけど、それは、ひっくり返すとね、そのモウソウダケがバンって、割れるわけ、結局、湿気とるし、中真空になつとるから、破裂するんじゃない。そしたら今度憲兵まで腰抜かす。こっちまでびっくりしちやって。ほんで、ここまでにしてくださいって、息子の時は、小学校の先生が、『これ以上ちょっと、あまりにも強烈すぎると、今の戦後二十何年、立つ

た後では、ここでやめてくれませんか、ありがとうございます、子供は寝れなくなります。考えすぎて。』って。丘ちゅうか、高台上がると大牟田は、有明海ちゅうのがあるんだよね。海側にねダーと一晩中明々なんだよ、真夏だからね、火葬してるわけ、結局、昼間暑いでしょ、やっぱり、敵機が来るから、B-29 とグラマンが夜、ダーと焼いてたよ。だからもう、怖かったねー、小さかったよ13歳ぐらいで、13歳前、(自分に言い聞かせるように)」

自分「その時は終戦間際で、空襲がだいぶ、九州の方にもやってきてた頃ですか。」

大叔父

「だからね、今ごろはもう、すぐ、ちょっとしたことがあっても、心理学者がきてからやるやろね。んな、できないもん。お前相当な人間だよって褒められよったよ。ほんとに、なんてゆうかな、(言葉を探しながら)怖かったな、ただよかったのは、火葬場の周りに、大牟田の市営墓地があるわけ、そこにうちの墓があったわけ、だから、焼いてすぐ入れてかえれた。おふくろは『どうした遺骨は?』って、『うん、遺骨はね、持って帰るとおふくろさんがまた泣いてから大変だから、お墓に入れてきた。』って、だからそういう苦しさが、精神的な苦しさと、もう、食料足らん、着替えがない、(苦笑)そしてまた、火葬場なんて言ってくると、においが移るわけね。夏だったから、頭から水ジャンジャンかぶってね。」

自分「悲しんでる暇もなかったんですね」

大叔父

「見るに見かねて、俺のいとこ、同じ年の女の子がいたんですよ、『マーちゃん、あんたパンツもないんだろ。これ履きなよ。』って持ってきたのがブルマなんだよ、女の子が履く、真っ黒の、それ借りてき、新品やからいいやないって、しばらく履いてた。今だった滑稽だけど、(笑ながら)全然なんにもないんだよね、学校行っても、8月15日で終わって、八月の十日ごろ、学校行ったら、今度は、学校に爆弾落としたのよね。」

自分「終戦の後にですか？」

大叔父

「うん、大牟田高等小学校。その時は怖かったね、伏せとたって、ドーンと上がったもん、穴も、でっかい穴あくしね。そんなときばかりは腰抜かした。もう、地べたに先生が、這って、こうしろってちゅうから、すると、そのまま、ガーンって土が上がって来るんだよな。それとか、ただ、うちにも、終戦後ちゅうのはどういうわけか、大牟田のすわまちゅうとこに捕虜の収容所があったでしょ、まだ二百何人いた頃、その、アメリカの輸送機がきて、そこ目当てに物資を落とすんですよ、結局、チョコレートだ、ビールだ、ピーマンだ、

そしたら俺ん家のね、庭にたまたま盤弾が一つ落ちたわけ、家はもう燃えとるけど、行ったらもろに穴が開いてるんだよ、巡査が言う、そしたら、そのあと、戦争中、自分とこの捕虜がいるとこ分かってるから物資をそこ目当てに後してくるわけ、一つだけ、うちに落ちてきたよ、落下傘がついてさ、なんていうか、石油缶に野菜がいっぱい入っててね。そんな時初めて見たんだよ「ピーマン」ちゅやつを、で俺小学校で習ったこともない、先生に聞いたってわからんっていう、お巡りさんに聞いても。俺みんなに配ったわけ、近所のおばさんたちに、だけどみんな食わん。怖いって言って、毒殺されるって。落下傘だけは俺が独り占めしてね、これは俺のものだ、俺が見つけたんだって、それで、その落下傘でズボン作ったりさ。ズボン無いから、戦災孤児に配って、」

自分「戦災孤児っていうのは空襲とかで？」

大叔父

「うん、親が死んじゃって、親戚に引き取られるけど、食料がないから、冷遇するわけね、すると、俺ん家に『マーちゃん学校に行こう』って来るわけね。うちは食わずに帰せん、食わせなって、晩飯になったら必ず来るわけね、戦災孤児がね、大きくなっても来たことあるよ。『お前んとこ行くとご飯食べさせてもらってたから来てたんだ』って、夏がきて、秋になるでしょ、下がパンツ一枚で、落下傘で作ったズボンじゃね、寒くてしょうがないんだよ。先生がね、イモやったからじゃないけど、お礼じゃないけど気が利かせて、ズボン下、昔白いズボンで、下を紐で結ぶ、兵隊さんのズボン下があったの、先生が『おい N、お前これに着替えてくれと、お前が一番前でこんな半ズボンで震えてると、授業にならんと、お前これに着替えてくれんか。』って先生が言うから、俺もう感動して『ありがとうございます』って、したら、親父が『俺にちょうどいい』っていうだよな。だけど、それだけは、パンツ履いて、ズボン下履いて卒業したたいな。だから、それ履いて記念写真映とるよ。今日見せられんけど、押し入れの上だから。そういうことで、みんな苦労したね。住まいも、俺は焼けてるし、結局、なんていうの、住むのも、おばさん家行っただって、住みようがないよ、6畳一間に親子7人かうちは、そしたらもう大変だから。うまあ、ちょうど、いまは産業道路でむかし、川があるわけね。交差したかわ、そこに水神様、水の神様、水天狗さん、そのお守りをして、防空壕に、みんなこう入ってたの。だけど、俺なんか寝ると来ないからそこで寝てた。そうすると、板なんか貼ってあるしね。水は湧水がずっと流れてたから、水はきれいなんですよ。蚊も少ないし。そこ行くと、おふくろは、俺が行方不明っておふくろがびっくりしちやって、毎晩いなくなってしまう。そこ行って寝てた。おれも一人じゃ怖いから、友達誘って。」

自分「防空壕で寝泊まりしていた。」

大叔父

「防空壕ちゅうのもあったよ。(思い出したように) ほんとね、うちの近所で、空襲の時に、防空壕の中に、牛が、やっぱ、暑いから、防空壕の中に人間がはいっとるったい、そこへ牛が頭突っ込んで、そして死んでるのよ。だから、中の人出れないんだよ。『助けてくれー、助けてくれー』って叫んどるけど、結局みんな行ったんだけど、でっかい牛が防空壕の入口頭突っ込んでるから、それをどかすのにね、もう、寄ってたかって、だけどあのうち皆で食ったんじゃないかな、今で言うステーキのいい匂いがいたけど、防空壕に頭突っ込んで死んでたもんね。」

感想

大叔父が生まれたときはすでに戦争が始まっており、子供のころに終戦を迎えた。当時の生活が大変苦しかったのは想像通りだった。だが、子供が自分の妹の遺体を焼かなければならなかったときの壮絶な辛さは自分では到底理解しきれないだろう。そのような、辛い時代を過ごしながらも、大叔父は、時にはいたずらもする健気な子だったようだ。アメリカ兵の捕虜に食べ物をあげていたという話は印象的だった。「鬼畜米英」という当時のスローガンがあったにも関わらず、敵国の捕虜を助けようという感情があったということは驚きだ。インタビューを依頼した時はあまり気が進まないようであった。やはり、過去のつらい記憶であるので、抵抗があったのだろう。しかし、インタビューでは、むしろ大叔父のほうからさまざまなことを語ってくださった。「苦しかった」「辛かった」と自分の経験を語れるのは、気持ちの整理がついているからなのか、そうでないからなのか分からない。思い出したくないが、語りたかった、複雑な感情を感じた。